

詩篇 69 篇

指揮者のために。「ゆりの花」の調べに合わせて。ダビデによる

- 1 神よ。私を救ってください。水が、私ののどにまで、入って来ましたから。
- 2 私は深い泥沼に沈み、足がかりもありません。私は大水の底に陥り奔流が私を押し流しています。
- 3 私は呼ばわって疲れ果て、のどが渇き、私の目は、わが神を待ちわびて、衰え果てました。
- 4 ゆえなく私を憎む者は私の髪の毛よりも多く、私を滅ぼそうとする者、偽り者の私の敵は強いのです。それで、私は盗まなかった物をも返さなければならないのですか。
- 5 神よ。あなたは私の愚かしさをご存じです。私の数々の罪過は、あなたに隠されてはいません。
- 6 万軍の神、主よ。あなたを待ち望む者たちが、私のために恥を見ないようにしてください。イスラエルの神よ。あなたを慕い求める者たちが、私のために卑しめられないようにしてください。
- 7 私は、あなたのためにそしりを負い、侮辱が私の顔をおおっていますから。
- 8 私は自分の兄弟からは、のけ者にされ、私の母の子らにはよそ者となりました。
- 9 それは、あなたの家を思う熱心が私を食い尽くし、あなたをそしる人々のそしりが、私に降りかかったからです。
- 10 私が、断食して、わが身を泣き悲しむと、それが私へのそしりとなりました。
- 11 私が荒布を自分の着物とすると、私は彼らの物笑いの種となりました。
- 12 門にすわる者たちは私のうわさ話をしています。私は酔いどれの歌になりました。
- 13 しかし主よ。この私は、あなたに祈ります。神よ。みこころの時に。あなたの豊かな恵みにより、御救いのまことをもって、私に答えてください。
- 14 私を泥沼から救い出し、私が沈まないようにしてください。私を憎む者ども、また大水の底から、私が救い出されるようにしてください。
- 15 大水の流れが私を押し流さず、深い淵は私をのみこまず、穴がその口を私の上で閉じないようにしてください。
- 16 主よ。私に答えてください。あなたの恵みはまことに深いのです。あなたの豊かなあわれみにしたがって私に御顔を向けてください。
- 17 あなたのしもべに御顔を隠さないでください。私は苦しんでいます。早く私に答えてください。
- 18 どうか、私のたましいに近づき、贖ってください。私の敵のゆえに、私を贖ってください。
- 19 あなたは私へのそしりと、私の恥と私への侮辱とをご存じです。私に敵対する者はみな、あなたの御前にいます。
- 20 そしりが私の心を打ち砕き、私は、ひどく病んでいます。私は同情者を待ち望みましたが、ひとりもいません。慰める者を待ち望みましたが、見つけることはできませんでした。
- 21 彼らは私の食物の代わりに、苦味を与え、私が渴いたときには酢を飲ませました。

- 22 彼らの前の食卓はわなとなれ。彼らが栄えるときには、それが落とし穴となれ。
23 彼らの目は暗くなって、見えなくなれ。彼らの腰をいつもよろけさせてください。
24 あなたの憤りを彼らの上に注いでください。あなたの燃える怒りが、彼らに追いつくようにしてください。
25 彼らの陣営を荒れ果てさせ、彼らの宿営にはだれも住む者がないようにしてください。
26 彼らはあなたが打った者を迫害し、あなたに傷つけられた者の痛みを数え上げるからです。
27 どうか、彼らの咎に咎を加え、彼らをあなたの義の中に入れないでください。
28 彼らがいのちの書から消し去られ、正しい者と並べて、書きしるされることがありませんように。
- 29 しかし私は悩み、痛んでいます。神よ。御救いが私を高く上げてくださるように。
30 私は神の御名を歌をもってほめたたえ、神を感謝をもってあがめます。
31 それは雄牛、角と割れたひづめのある若い雄牛にまさって主に喜ばれるでしょう。
32 心の貧しい人たちは、見て、喜べ。神を尋ね求める者たちよ。あなたがたの心を生かせ。
33 主は、貧しい者に耳を傾け、その捕らわれ人らをさげすみなさらないのだから。
- 34 天と地は、主をほめたたえよ。海とその中に動くすべてのものも。
35 まことに神がシオンを救い、ユダの町々を建てられる。こうして彼らはそこに住み、そこを自分たちの所有とする。
36 主のしもべの子孫はその地を受け継ぎ、御名を愛する者たちはそこに住みつこう。

詩篇 69 篇も前回に続いての長篇となります。タイトルには「**ダビデによる**」とありますが、本篇が本当にダビデ自身によるものであるかどうかはやや疑問の残るところです。それは、35 篇で「イスラエル」ではなく「**ユダの町々**」という表現が使われており、どことなく分裂王国後の時代を思わせるからです。奥村個人の見解としては、預言者エレミヤの経験と重なるところが多いと見ています。

この詩人は深い悩みの中にあって祈っています。「絶叫の祈り」と呼んでもよいほどの魂の叫びが聞こえてきます。「**水が、私ののどにまで、入って来ました**」（1 節）、「**深い泥沼に沈み**」（2 節）、「**大水の底に陥り奔流が私を押し流して**」（2 節）といった表現は、もはや命尽きる寸前のような詩人の状況を示しているでしょう（これらの表現は 14,15 節で再度登場します）。預言者エレミヤは同国人に憎まれ、実際に井戸に投げ込まれました。

そこで彼らはエレミヤを捕らえ、監視の庭にある王子マルキヤの穴に投げ込んだ。彼らはエレミヤを綱で降ろしたが、穴の中には水がなくて泥があったので、エレミヤは泥の中に沈んだ。

（エレミヤ 38:6）

詩人の敵（「**ゆえなく私を憎む者**」4 節）は、根拠なく彼を殺そうとしているようです。更に、

詩人が盗みを働いたという偽りの証言をしている者もいました（4節）。

ああ、悲しいことだ。私の母が私を産んだので、私は国中の争いの相手、けんかの相手となっている。私は貸したことも、借りたこともないのに、みな、私をのろっている。（エレミヤ 15:10）
辛いところは、詩人が身内からも見捨てられてしまったことです（8節）。地上における最も身近な存在である家族さえ彼を裏切りました。

あなたの兄弟や、父の家の者さえ、彼らさえ、あなたを裏切り、彼らさえ、あなたのあとから大声で呼ばれるのだから、彼らがあなたに親切そうに語りかけても、彼らを信じてはならない。

（エレミヤ 12:6）

しかし、詩人の内にも罪との葛藤があったようです。このような苦しみに遭う理由はまさか自分の罪にあるのでは？という疑念が湧いてくる。5節で突如として「神よ。あなたは私の愚かしさをご存じです。私の数々の罪過は、あなたに隠されてはいません」と罪の告白を始めるところに、詩人の内的不安の現れがあるでしょう。この内省は重要です。まず自己を省み、神との関係が大丈夫であるかどうかを確かめなくてはなりません。詩人は「断食し」「荒布を自分の着物」としました（10-11節）。これは悔い改めの表現であり、預言者たちはまさにそのようにして民の罪を代表して祈ったのです。しかし、祈られている者たちはその預言者の姿を嘲笑い、「物笑いの種」としました（11節）。

13節では「恵み」と「まこと」という、重要な用語が出てきます。これは契約的な用語であり、詩人と神との間で交わされた契約ゆえに、救いは必ず来るという確信が述べられています。「御救いのまこと」という表現は美しい。「御顔を向けてください」「御顔を隠さないでください」（16,17節）と必死に祈り求める詩人は、自分に対して神が怒りを向けるのではなく、顧み、苦境から解放してくださることを切望しています。18節では二度に亘って「贖ってください」という表現が出てきますが、原文では「ガーアール」と「パーダー」という異なる言葉が使われています。「贖い」とは、困っている親族を助け出す義務と結びついた概念ですが、詩人は二つの言葉を使うことによって立体的に神の救いを表しているのです。

詩人には「同情者」も「慰める者」も地上に見出すことができませんでした（20節）。敵対者たちは、苦しむ彼を嘲笑いながら、「食物の代わりに、苦味を与え、私が渴いたときには酢を飲ませました」（21節）。食事とは本来親密な交わりを表すものですが、それが敵意と嘲りの表現として用いられたのです。「苦味」とは身内を亡くした人が食べる葬式の食事、「酢」とは飲むことのできないほど酸味が出てしまった酒のことです。

22-28節で、詩人は神に復讐を求めています、これは敵対者が詩人に行なったことがそのまま彼らの頭上に返って行くようにとの願いです。「食卓はわなとなれ」（22節）、「目は暗くなって、見えなくなれ」（23節）、「陣営を荒れ果てさせ」（25節）、「彼らの咎に咎を加え」（27節）、「いのちの書から消し去られ」（28節）と連呼される呪いの表現は、人間の生きる

意味のすべてが抹消されていくことを表しています。これは恐ろしいことであり、食事と交わりが断たれ、感覚機能が失われ、所属すべき場所がなくなり、神との関係さえ断たれることが求められているのです。

さて、ここで読者は「祈り」における大きな問題に直面します。イエス・キリストの福音に生きる者は、「**自分の敵を愛し、迫害する者のために祈りなさい**」（マタイ 5:44）と教えられているからです。詩篇における敵に対する赤裸々な怒りと呪いの言葉は、新約の光に照らしたとき、どのように見えてくるのでしょうか。おそらく、詩篇に登場するこのような祈りは、神の義にそぐわない悪に対する怒りを表しており、読者に神の義が貫徹されることへの熱心を読者に保たせる役割を果たしているのでしょう。この熱心はキリストの到来を待ち望んでいるのであり、これを語っている詩人も、彼の言葉によって代弁されている読者自身も、十字架の贖いによって怒りから解放される必要があるのです。

30-36 節では、詩人が新しい領域に入って行ったかのように、賛美の言葉がほとぼしり出ます。何か状況が変化したのでしょうか。いえ、まだ何も変わっていなかったとしても、彼は神を賛美することによって、自分の思いのすべてを委ねたのです。32 節に出てくる「心の貧しい人たち」という表現は、山上の説教の冒頭に出てくる「**心の貧しい者は幸いです。天の御国はその人たちのものだから**」（マタイ 5:3）を思い起こさせます。「心の貧しい者」とは、自らの罪を知り、打ち砕かれ、へりくだって神の救いを切望する人のことです。そのような心で生きる人は、かえって「**心を生か**」されることになるでしょう（32 節）。この賛美の仲間には被造世界も加えられます（34 節）。嘆きと訴え、憤りと願いを経て、この詩篇はついに賛美に至って終わりました。どんな絶望的な祈りも、最終的には頌栄でもって終わることができるモデルであり、それは私たちの人生において実現されるべきことでもあります。

最後になりますが、本篇は「メシヤ詩篇」としても有名です。「それは、あなたの家を思う熱心が私を食い尽くし、あなたをそしる人々のそしりが、私に降りかかったからです」（9 節a）は、主イエスが宮清めをなさったときに引用された箇所であり（ヨハネ 2:17）、「あなたをそしる人々のそしりが、私に降りかかった」（9 節b）は、パウロが主イエスの身に降りかかった人々のそしりを指して引用しています（ローマ 15:3）。「**彼らは私の食物の代わりに、苦味を与え、私が渴いたときには酢を飲ませました**」（21 節）は、十字架上で主イエスが飲まれた酸いぶどう酒の箇所ですべての福音書記者が引用しています（マタイ 27:34,48、マルコ 15:36、ルカ 23:36、ヨハネ 19:28,29）。このように、本篇は主イエスの受難を暗示するものであり、「私は、あなたのためにそしりを負い、侮辱が私の顔をおおっていますから。私は自分の兄弟からは、のけ者にされ、私の母の子らにはよそ者となりました」（7～8 節）もイザヤ書 53 章の「苦難のしもべ」の響きを持ちます。69 篇を残した詩人の怒りは、まことに主イエスの十字架によって贖われ、赦しと栄光の冠に変えられたと言えるでしょう。